

長久平軍記



こかせいしかるべし 申ければ伊木清兵衛と云者罷出 尤 片桐殿の御加勢可然と申ければ伊木清兵衛と云者罷出 尤 片桐殿の申仕る、処至りといへとも當時(今)秀吉公の威勢天下に並ぶ者なし追付日本を手に入らる、(8) 事鏡につつすが如く也何程義を立候とも理に押れては御家の滅亡とも成べしまた秀吉公に御味方阿らば御家の繁昌たるべしと只一筋に御家の繁昌を思ふて申事也と申せば勝入津くぐと聞て各の了簡(考え)何れとも申難し但清兵衛が了簡八兎角来久しき(将来)を願ふ所なり士(武士)八方便(手段)を替謀を致ても先祖を立るを(9) 皆本(源)とす至らば秀吉公へ味方致へしとの返事有けれ八武蔵守八勝入の婿なれば 同 秀吉公へ属しける

一、織田信雄 遠州 浜松へ使者を立て 御頼申されけるには此度秀吉と既に合戦に取結ぶ所に信長厚恩之輩 蒲生(氏郷)丹羽五郎左衛門池田(勝入) 森武蔵守堀久太郎初め近国の

諸将秀吉二相随う我等(10) 武運爰に尽きなんとす阿われ君二御加勢預らずんば 忽 恥辱を得ん 全く命越惜に阿らず父信長の名を穢し 申事我生前之恥辱なり 願く八君御力を添被下候ら八一戦を決して討死申ば武門の面目後世之思ひ出たるへしと申送られる 遠州 浜松之城耳於為て徳川三河守家康公きこしめし 誠(11) 天下の人信長の舊恩をわすれ秀吉に組す 義士(忠義の臣)たる所為に阿らず家康味方申さん苦勞になさる、事なかれと仰御遣ける

一、天正十二年甲申三月 俄尔御加勢之御陣觸阿り此時二御領国八参州 遠州 甲州 信州 駿州 都合五ヶ国 此城二諸將被入置 遠州 濱松は家康公御在城也

(12) 参州 岡崎之城八 本田作左衛門重次 吉田之城八 酒井左衛門尉忠次

- 同 西尾之城八 酒井雅樂頭重次
- 同 横須賀之城八 大須賀五郎左衛門康高
- 同 駿州 田中之城八 高力与左衛門清長
- 同 久野之城八 久野三郎左衛門(虫ザシテ不相知)
- 同 深澤之城八 三宅惣右衛門康貞 ※久野宗能
- 同 長窪之城八 牧野左馬亮康成
- 同 沼津之城八 松平周防守康重
- 同 奥津之城八 松平玄蕃守家清
- 同 甲府之城八 平岩七之助親吉
- 同 郡内之城八 鳥井彦右衛門元忠
- 同 伊那之城八 菅沼大膳定家
- 同 佐久郡之城八 柴田七九郎重政
- 同 小室之城八 芦田下野守信守

- 同 掛川之城八 石川日向守家成
- 同 右の通り御領地の分也
- 一、池田勝入八秀吉公出陣前に一働き致し功を見せ申さんと幸 犬山の城主中川勘右衛門貞成勢州峯の城へ加勢に行歸り
- 道にて池尻半左衛門と途中の口論にて討ち果す(通説は討ち果る)
- 故に当時明城故勝入は幸 此城主にて案内能知けり旧国の事故地下人有り彼是と取持搦手より不意に(15) 切入留守居に久(清)藏主と云僧有りて此僧懸廻り下知(命令)し防といへども小勢故難なく城を乗取(れ) 勝入の人数(軍勢)入る近辺の在々を放火して威を振ひけり是は天正十一年三月十三日也

一、天正十二年三月十五日勝入犬山方出陣して小牧近辺を焼き払いける大い奈る損なり惣而焼働は自国より敵国をお飛やかとんとて放火(16) 乱防(乱暴)又は苗田などする物也敵国に攻め入て

近辺郷民をほじめ近付地形の案内を知り敵の様子を聞用いて我自由を得る事也然るに勝入盤近辺を焼働郷民共恐を奈して遁る又此方が兵糧陣具に至るまで色々事かき様多き事也後に秀吉公犬山へ来たり玉ひ此由越被為聞不機嫌にて勝入を大に志かり玉う也(17)

一、家康公八巻万五千余騎の人数にて浜松を御立阿り清須へ入らせられ候 処信雄御加勢の苦勞を述べられ御軍謀對語阿り先信雄には長嶋を在城と任玉ふ儀御不審なり清須を在城としては尾州境目の城不足なり別而北東に砦はなく可然処に砦を構至るへしと

被仰又御家中旗本の諸士人質を御取候哉と御尋阿信雄卿(18)云く数代の家来故取不申由也是は甚だ御油断也早々御取候へと有

- 小折之城主 小折之城主 生駒八右衛門
常滑之城主 常滑之城主 水野監物
藤江之城主 藤江之城主 久松佐渡守
緒川之城主 緒川之城主 水野惣兵衛

一、家康公信雄卿清須を御立有て三ツ井重吉城は愛知県一宮市丹陽町重吉字城戸)小折(城は愛知県江南市小折)近辺

を御巡見有砦を御見立有所へ勝入犬山より出て清須の近在焼働御所早速御出陣阿れば早々勝入犬山へ人数を引入けり御所は夫より三ツ井重吉小折近辺を御見立生駒八右衛門構(屋敷)是を砦に御見立生駒妹(21)は信長公之妻信雄之御母なり

一、三月十七日濃州の金山城主森武蔵守居城は大垣方程近き犬山を油断して池田勝入に乗取られ甚無念に思ひ

に付安井將監を以方々の城々へ人質を取に被遣候先黒田へ行井左衛門へ人質の儀申渡兼而此方方差上度候 処幸なりとてケ様の節八妻子足手まと心を召連れ可被下候とて相渡す夫方別安賀へ行森勘解由方へ参り候 処数代々の家来御疑い人質出せと(19)いふ事有とて出し不申候 森は浅井田宮丸を討たる故別安賀を領する也関ヶ原役は家康公御味方にて討死 仕候得共跡は御取

- 黒田之城主 黒田之城主 沢井左衛門
岩崎之城主 岩崎之城主 丹羽勘助
一ノ宮之城主 一ノ宮之城主 関小十郎左衛門
竹ヶ鼻之城主 竹ヶ鼻之城主 不破源六
加々野井之城主 加々野井之城主 加々野井弥八
大野之城主 大野之城主 水野大膳

勝入に知らせず犬山より先に出張し羽黒の八幡の森を後に当て前に小川越隔て一働致へしと備をしねつ(音鼓)扣たり

玉 処に森の内拜殿の脇より余程成白蛇出ける故宮の神主是越見て長可(22)に申八是全く八幡宮の神霊成へし御勝利疑なしと祝言を申せば長可是を見て血氣の勇将なれば直に飛かかり何の八幡の神跡成遍しや我八幡に勝利を不頼と云う俣に彼白蛇を引とら入口より尾迄二ツに引さき神主之面(顔面)に投付られ今日の門出よしと被悦けり彌宜(神主)は鼠の遁るが如くこ楚くと通行けり是は以前此振合(振舞)に似たる事有故猶更武蔵(23)守立腹とみえたりけり

一、御兩所八所々砦を御見立御本陣は小牧山と御定 俄に要害を構へ酒井左衛門忠次を斥候に出仕れけるに忠次小牧方はくるあたりいぬやましおおききはくるあたりいもりむさしのかみ(しゅちやう)ぶす羽黒辺(犬山市大字羽黒辺)へ出森武蔵守が出張の様子を

一、三月十七日濃州の金山城主森武蔵守居城は大垣方程近き犬山を油断して池田勝入に乗取られ甚無念に思ひ

見て早々返り訴えければ家康公聞し召森斗かと被仰候
忠次申上るは人数羽黒へ出張後に八幡の森を当て前に
小川を隔て罷在候其疎(疎子)殊の外いれて(一)負つて見へ
申候(24) 某(私)手勢にて罷出て一当て阿て(二)戦交えて

鬼武藏守二参河武者の勇気を見せ申さんといへば家康公被聞召
武藏守左程にいれて居盤※轆轤引致すし何の造作(手間)は有満

急に追い来る(25) 時に左の方より奥平勢進二掛る故酒井勢を
追捨奥平方へ切て懸るを酒井勢取て返し討て掛る故森が勢

崩立て敗軍す依て追討に切取ける忠次が人数の遣い様八我
手足を遣すがこし諸人は是をかんじけり

(出兵)をも知らせ須不快に思ひて居る其上小牧より(家康)信雄
連合軍)も多勢の出張たると聞及びいか可致と詮議有折節
稲葉伊豫守(美濃国曾根城主稲葉一鉄)も犬山に乗り勝入を

いざいながせんぎ 敵の多勢に追立られ付入に犬山を取れば詮
議めて云う長詮議して敵の多勢に追立られ付入に犬山を取れば詮
議めて云う長詮議して敵の多勢に追立られ付入に犬山を取れば詮

なし(仕方がない)崩立たる勢を追い来る所を待請て戦へし
という勝入尤なりと(勝入)父子稲葉三人城内より(28)

人数を繰出し犬山の段(中腹の広い場所)に軍勢を王け備を立
追来る敵を相待けり家康公よりは犬山の人數(秀吉の軍勢)出て
後詰(追い討ち)せばあやぶかるへし早々追捨(追うのをやめ)引取へ

しと再三の御使に乗りければ諸勢早々引上げる羽柴筑前守秀
吉公は手早き大将にて早速出勢を心懸らるゝといへども此時分
(当時)は自分人数少く皆信長の旧臣にて有之故各々へ頼みを

懸人数を集(29)申さる、故早速に人数揃わず延引におよび申

※轆轤引き：敗走する振りをして敵を誘い込み予め隠し
ておいた軍勢とて挟み撃ちにする戦法

森の家人(従者)野呂助右衛門と云強者取てかへし相戦松平
又七郎家信(十七歳後紀伊守)野呂に馳合て(馬を駆けさせて)

信が鎧持馳来たりて野呂が右之手を双の手(両方の手)を以てく
だけよと握りける其内に家人共馳付鎧持が捨置たる鎧を取て

野呂を突通須家信其隙に下よりはね返し野呂が首を切取公覽
(台覽)に備へ我等(自分は)家人共に助られ候よつす言上す公

高名と御感有けり勝入は犬山之城にて羽黒の(27)合戦注進(知ら
世)を聞て早速人数を出し後詰有るへしといへども森羽黒へ出張

如武藏守羽黒にて敗軍を聞玉ひひかなる事歎仕出さん(どんなこと
を仕出かしたのか)と軍勢追々跡方来るへしとて三月廿一日二
おあさか たちいせ わたし しろしろにしおきもしうけそれよりみのじへ いぬやま

来り玉ふ三月廿二日 榊原小平太康政小牧山の砦成就して
家康公へ申けるは小牧山の砦を敵に被取にては国中を見透され
候て悪るへし(30) 早々此方の砦へ御歸り可然と言上頼信

雄も人数五六百斗を清須に籠められ小牧も籠城成るべき地形の
由申故榊原に奉行仰付小牧近辺の郷民共家康公へ何にて
も御奉公可仕旨仰付有之故大勢来りて働申候に

付砦成就の由申上る君被聞召康政今度の出来物と御答
被遊候小牧繋の砦は南外山村蟹之清水宇多津村三ヶ所
砦を取て(31) 人数を入ける宇多津といは北外山の内に宇多津

屋敷といふ二方は大沼にて要害堅固の地なり又小牧方清須の城

つなき ひらむら さいわいささくらのすけのふるやしきこれある とりて おんとりたて
繫には比良村に 幸 佐々内蔵助方古屋舖有是を 砦に御取立

なり小幡には織田信光の古城の跡有直に砦に 被取立本田豊後
のかみひるたか いれおきてさんしゅう つつろ いわさきまで とお ゆえおぼた とりて
守 廣孝を入置而三州へ通路として岩崎迄は遠き故小幡の砦

これ つな こまき (32) みなみとやま いちりぞれ おぼた にりぞれよりいわ
にて是を繋ぎ小幡より 南外山へ志里夫より小幡へ二里夫方岩
崎へ二里半余岩崎方岡崎へ六里余家康公の上意に篠水柏井の

ものども おおせつかわされる もしきんじのあたり ひてよし かせんある
者共へ被仰 遣には若近日其邊にて秀吉と合戦有へしかなら
ずすし わくこと こねんころ じやういありす ありかた だに

須少もさ王く事なかれと御念頃に上意有れも難有がり何にやら
ず御奉公仕 度とて植田権藏半田亦助其外にも 頭立 候
ものども こまき おんれい さんじき
者共は小幡へ御礼に参上す

(33) ひてよしとさんつにじゅういちちおおさか しゅせいせいせ きた しゅうろ しおき
一、秀吉公三月廿一日大坂を出勢伊勢へ来り城々の仕置
申付夫方美濃路へ廻り同 廿七日に犬山の城へ入らせられ其日

はや大草へ出 張樂田羽黒近郷を巡見有敵に多勢を見せかけ兵
威を振ひ地形の善悪を見て地の利を考へ小幡山に向ひ所々へ

と 軍之詮議して敵の様子を見るに先小幡を急に攻る事成難し
縦へ責る共早速は落まじく至は(結局は)永に(長期に)對陣して

大軍の兵糧も続くまじ其上小幡へは日々人数増りて見ゆ察る
廻參州は定て人数春く(少なく)なるへし我手勢を以三州

入中入をして岡崎を責とらば家康も小幡に對陣は叶不まじと評
義して秀吉公の御前に出て申けるは敵軍小幡山に日毎に増りて見

ゆる定て參州表は空虚なるへし密に岡崎を於ぞい(襲い)
取物ならば敵軍 不戦して乱なんと申上ければ秀吉公

御聞召 尤 成事成れども敵は良将なり油断は有萬じ今暫く
見合ての事可然と阿れば勝入重而申けるは(事)延引して

は却て悪かるへし早々攻入て可然と連て望ければ秀吉公左
も阿らば三州へ働入て所々を放火し岡崎を攻ずとも早速引取

篠水邊に砦を取り堅く是を守て折々三州へ働入て敵を

むかいしる かまえ になすう いれおくのかん しまにゅう いぬやま しろ ひてよし
向城を構へ人数を入置此間に勝入は犬山の城をば秀吉に

わた おおきさ とりて いたるころ (34) きんく しょうひてよしとひしゅう
渡し大草に砦を取立ける至 廻 近国の諸將秀吉公尾州へ

出張と聞て追々馳付る故早速三萬余騎の人数となる夫より
遠国の諸將追々馳付四月八日頃迄には惣軍十二万余騎程に

見ゆる
一、信雄卿領分境目東には砦城無之故家康公より御指図

にて篠水に砦を取立可然とて村瀬作左衛門権右衛門へ
被仰付けり其所を領し一揆の頭として加勢す篠水の庄は(川

の北也) (35) おおやま あけち にしお いずみ いじき うつつ ひさき おおきさ
大山 明知 西尾 和泉 一色 内津 久木 大草

下市場 庄名 迫間 神明 関田 出川 名久里 神領 上大留
下大留 高蔵寺 玉野 外ノ原 松本 野口 林 堀ノ内 上野

大泉寺 下原 白山 足振 神屋 柏井の庄は上条 下条
中切 此之三村を云同四月四日池田勝入は家臣共を集色々

於飛やかし申へし必勝にほり利を (38) うしなう ず もつし
失ふべから須と申ふくめ

玉手勝入我手勢斗りにては小勢に御座候 問加勢を
被仰付候様申上ければ三好孫七郎秀次森武蔵守長可を

加勢として秀次を大将と定めらる、也勝入重て申けるは三好
もりはとれがし いったか せんちう けんぎ ひょうか しがた だれ たけ

と森八某が一家なり戦功の檢義(評価)も仕難し誰にても他家
方武功有將を一人差添え被下置候様にと申上 尤の事

(39) とて堀久太郎秀政を加えらる、秀吉公重て尾頭甚右衛門を
以て三好森堀の三將へ被申遣けるは勝入勝に保こりて必々

敵を阿なごる事なかれ只參州へ働入て所々放火して岡崎へ
攻入らずとも早々引取べし則勝入軍に勝て誇たる者也必々

堅慎城を攻ずとも早々引取べしと申遣わさる 各 其意を得て
しがつむいか しゅせいひてあひ てはい がくてん うつりおあさむら せいどろ ふれ

四月六日に出勢之手合(手配)に樂田へ移り大草村にて勢揃の触
なり勝入は三州へ働入に付犬山より人数をかり大草の砦

なり勝入は三州へ働入に付犬山より人数をかり大草の砦

なり勝入は三州へ働入に付犬山より人数をかり大草の砦

とおせられどらえどもおかつきょう さぞうらわ ござうつかまへし もつされ
しと被仰候得共信雄卿も左候はば御同道可仕と被申け
れば其義は御心次第とて人数割を遊し先手を五將に被仰付
おあすがころうざえもん さかきばらこへいた ほんだひこえもん
大須賀五郎左衛門 榎原小平太 本多彦右衛門 (49) 水野惣兵衛
にわかんすけ これこしやうなり
丹羽勘助 是五將也

こまき おるす さかいさえもんたたく いしかわはうさかみかすま
小牧の御留主は酒井左衛門忠次、石川伯耆守数正、本多平八郎
忠勝 此三人也

一、五將の衆中(二回)は四月八日の暮方時刻に小牧山を何も
旗を捲て物静に小幡まで押行けり本多豊後守と相談可仕
とおせつけられどらえもん つまおはた しろ ちやく ふんのかみ ひまじやうあ
と被仰付候(二)付小幡の城へ着して豊後守と評定阿り

兎角押行敵の中を討破るべしと云其時水野惣(50)兵衛申けるは
尤横合に敵の中を打ち破り候とも大軍にて両方より跡
(後方)を包れては却て利を失うべし敵勢の行跡喰付合戦をはじ
め追崩へしといへば何れも此義を尤なりとて本多豊後守斥候を

とお かが そのうまかしたま もつされ さぞうもす このせうまか
通り懸るを其馬貸玉へと被申ければ左蔵申は此節馬を貸せとは
あめかり (53) さしとおるからかさか いうよう ことお あ のりぬけ こと
雨降に差て通る唐傘貸せと云様な事御ゆるし阿れと乗技る爰に
ひてまじやう つけおか どひこんえもん いう はるかこれ みて はきた
秀吉公より附置れたる土肥権右衛門と云もの遙是を見て馳せ来

ひんば めすつま とびお ひてく のせ おと たまつわがみ ぼりつ さんざん
り類馬(雌馬)より飛下り秀次を乗て落し玉我身は歩立にて散々
はたら そのうち しらえこんたゆうよしだしゆうひらのこんへまきかすまむらげんえ
に働く其内に白江権大夫吉田修理亮平野権平牧主馬村善右
衛門等大に働く此所にて討死之者岡本彦三郎穂留大学

木下周防木下助衛門木下勘解由青山又三郎(54)也木下勘解
ゆざえもん いやく ひかすうちじに ころろ さだ きん こい さしもの ち
由左衛門は一足も不曳討死と心を定め金の御幣の差物を地に
立置我討死の印楚と名乗やいなや討死す青山又六首を取軍過て

少々なる塚に右の差物を立置たり其後小松杯植立今に勘解由塚
是也
これなり

一、両御前八四月八日夜九ツ時過に小牧山御出陣有て御道筋は
如意原勝川へ御越の節夜中の事なれば石黒善九郎□□と申者

印場へ呈して敵勢の押通る所を見定むるに敵の勢兵糧を遣い支度
すると聞て五將は小幡を押し夜明頃敵の跡勢に突懸る(51)四月
八日の夜池田父子森堀三好各先へと押し夜明頃岩崎 辻
着す森は岩崎長久手の間に着須堀は長久手堂の前迎に着

須三好は漸 畑ヶ根高根山 邊に着須夜も明ぬれば兵糧を
致し暫く休足してねる所へ家康の御勢五將の衆中猪子石
原の方より追懸る三好は我勢のおくれたる者か又は篠本・柏井の郷
民ども味方に参るか猶も油断したる処へ大須賀五郎左衛門 (52)

跡方喰留突立てく 相戦小坂部三十郎久世三四郎武功の
侍の故足輕共を下知して鉄砲敵打懸突懸れば思いよろざる
合戦にて秀次方は打立られ敗軍す五將は愈勇み進て追討にす
秀次不意を討る事なれば大に驚 手元の勢迄崩れ立秀次も
馬を失ひ既に阿やつく見へたる所へ可児左蔵(才蔵)といへる勇者

御案内申上此所(55)何と云村と御尋候へば勝川村にて
候と申上る甚だ御喜悦にて村の少々東の方田中に森有
此所にて御休足御湯漬を被召上甲冑を被為召狼煙を揚させ
られ是小幡へ合圍なり此時善九郎御指物竿に勝川の竹を伐て
差上る(御吉例に相成今に勝川村より御旗竿差上る) 夫方瀬古へ

御廻り遊されける此時豊後守小幡の城の北切峯へ出て勝川の
方を見れば件の狼煙奈りさては君小牧山御出馬也追付此地へ
御越と(56)察し御道筋へ御迎に出る家康公豊後守に御逢有て
五將は何時頃罷出候哉と御尋に付丑満の頃過て御立有

最早合戦始り候 敵物音聞え申候と申上る君夫より
猪子石原の方へ懸り本地村浅尾山より岩作村色ヶ根山へ御登り御
床机を立させ玉う此時は四月九日朝日の出也内藤四郎左衛門
高水主水を物見に被遣敵問の様子地形の善悪見届参る様にと

被仰付けり

(57) 一、天正拾貳年甲申四月九日未明池田勝入信輝父子岩崎

迎迄押出す此時勝入の先手片桐半右衛門伊木清兵衛云様

は此所の敵城の主丹羽勘助氏次人数を引連小牧山へ出陣の

由承 及候得ば責取可申候と云勝入聞て成程

小勢籠居候はば手間も入まじ朝がけに攻取べしとて烏井ヶ原に

旗本をすえ六坊山より先手を以て攻懸伊木片桐武千之勢を以

鯨波ときの声を揚る城中 (58) にも敵勢の城下を通るを見て兼て

覺語(悟)の果玉(決死隊)を揃へ氏次第 丹羽次郎助士卒を

下知して働といへども此城士分八王つか漸 五十に足らぬ人数

故折々城外より追込(5)る加藤太郎右衛門忠景之を見て白糸

綴の鎧に天衝の大差物月毛之馬に打乗大身の鎧引提

大音声にていひがいなき者共かな討死せば城外にて死せよと云儘

大身の槍にて五六騎なく (59) りたおし是を見よと門外へ大勢を

突出須至れども敵大軍なれ八彼八人一同に十四五人おりかさな

りついに牧野佐平治討取り治郎助是を見て加藤討せて何可せん

と紺糸綴の鎧に芦毛の馬に打乗て鎧引提続けや続け者共と

云儘門内にて敵式三人突伏夫より門外へ敵三度迄追出し其身

も痛手おいなから猶強く懸廻り (60) 働所を池田紀伊守之助

(元助)之手方打出須鉄砲治郎助が内兜へ打こまれ馬方下へ

どつと落之助の勢の内土肥七右衛門という者はせ来り首を取此

外丹羽助六郎比類なき働して討死す須賀治郎右衛門弓にて敵

十一人まで討たおしけり今井七右衛門勝澄は本は甲州武田信

玄の御使番十一人の内也父は九兵衛勝利とて青地金にて百足

を絵書 (61) たる差物にて敵八九人打取たり終には是も討死す勝

澄に四人の男子有福島正則に仕へる加藤太郎右衛門というは

ながくてむら あるじ ながくて りまう にわかんすけうじつく いもつとむなりあいち

長久手村の主にて長久手を領す丹羽勘助氏次の妹婿也愛知

郡傍示本村領主丹羽治郎助氏重が為には小冨なる処

氏重末若年故氏次小牧御陣の御共の留主無心元とて 則

太郎えもん いわさき るす おんたのみ あいなるしげたかげ

太郎右衛門へ岩崎の留主(留守)御頼に相成氏重忠景ともに一

所に死す生年四十一才也此外士分

(62) 丹羽伝七郎 丹羽藏之助 丹羽四郎右衛門 丹羽善七郎 丹

羽助六郎 丹羽弥太夫 須賀久四郎右衛門 須賀六藏 今井七右

衛門 岩詰理右衛門 林市蔵 新藤久蔵 森伝次郎 加藤藤

左衛門 今井与右衛門 鈴木万作 鈴木五郎右衛門 柴田喜八郎

牧源四郎 武谷又助 中嶋与七郎 後藤正十郎 横井市左

衛門 宝田五郎右衛門 水野喜右衛門 山本市蔵 加藤又兵衛

丹羽左衛門次郎 今井四郎三郎 丹羽孫作 古橋吉太郎 (63) 鈴木

助蔵 鈴木太郎助 山村兼蔵 鈴木久太郎 鈴木源治郎

存たにゅううへい ちゅうなんやじゅうう

武谷十郎兵衛 中南弥十郎

此中南は伊勢神主慶徳藤太夫の甥也士分四十一人の外

足輕六拾人弓者三十八人中間又者七十人町人

三拾人右の内浪人老人助る跡は不残討死味方にて都合

式百三十八人死す敵方にて人数八十八人死す此内紀伊守

旗持城より打出す鉄砲に首の骨を打折れどつとたある、(64) 其時

鳥井ヶ原にて首実検して物初めよし(幸先よし)とて喜悦の処

長久手村にて合戦という風聞有故士卒甚驚けり四月九日卯

の上刻より辰の下刻近に落城氏次妻子共は先達て清須の御城

へお預り被下置為故女人は老人も無障其外の足手まとい八八日

昼頃方敵三州へ攻入と風聞 (65) するに依て八日の夜に入近在へ

預りけり丹羽治郎助鯨波の声聞へける時誰なりとも老人敵を切

ぬ 小牧へ注進可致と云う時一族平五郎と云者承る只

ひとりたけのやまの西へ出る高針村へ出夫方上野村守山村へ懸り

小牧へ参る至れども兩御所並氏次も出陣跡(後)にて平五郎

は直ちには岩崎へ歸る道にて長久手村の下にて氏次に出逢志かしか

の様子申(66)歸る時に傍輩共申には平五郎は能き節の使也

御使なくば貴殿も城を枕に討死たる遍くに御仕合と云行違けり

平五郎思ふにきや津は(あいつは)我臆病にて遁ると心得て申

事なりと存後日に何れ合戦阿らば眼をさませ可申と心懸け

の夜城に留りける処夜明に鯨波の声聞より門外逃出さん(67)とする

に門外大勢にて攻懸るいかげんとする内に大木の葉茂りたる有け

れば是ぞ我命の親と駆け登りて始終を篤と見物志たりけり

併卯の上刻より輝政の引取りまで木の上に音をせせず志てく

くまり居て(縮こまつて居て)漸巳の下刻に木より下りたり此池田

輝政は大草の砦に残して被参と勝入被申けるを押し大草には人

数を付け幡野と三郎を残し少人数にて被参けり長久手に合戦始

ると聞て勝入紀伊守備を(68)戻され候に付輝政を片桐

伊水に付烏井ヶ原に相待れけり

一、田中久兵衛吉政は只一騎馳来り堀へ云秀次の人數崩れ

候得ば勢(軍勢)を詰(集め)候らへと申堀がいう其方は何

故に此処へ来ると田中云某は先手へ参ると云捨て通る秀政思

に味方敗軍とて秀次遁玉ふならんや様成使には使番といふ阿り

(69)きやつ(あいつ)は必定(きつ)と逃来ると見へたり依て久太郎方

より森池田へ使を遣し家康公出馬にて勢も夥しく相見へ

候間此方へ備を被戻候へ一ツになりて戦うべしと申遣け

れば池田へも御旗本勢向かつと見て池田より堀久太郎方へ使をし

此方へも敵勢見申す此方へ人数を引連れ来り一所に可戦と

互に使者往來す時に堀監物は久太郎方家老なり久太郎と

一緒に堂の前に備を立居る処に後の方より鉄砲の音聞き申故

(70)斥候にてる処へ三好勢大須賀に追崩され敵味方入り秀政

備方五町斗後追来り監物直に行当り大須賀勢と戦ける

至連共廣き場所故兩脇より四将追まくり来る大須賀衆久世

三四郎坂部三十郎と行合互に敵數攻戦といへども敵は手を揃

へ一たんに懸り攻立る故久太郎備まで引取一所に成可申とて

(71)手勢を引揚んとするに三四郎狸の緋の陣羽織を着して監物方

後徒きて喰留め追へば志ざり留れば来たり日本に名を振いし監物

も何共成難し漸久太郎方備迄引取一所になる久太郎は

堂の前に備をかためて居る前へ家康公の御先手の勢堀方備に

行當り散々に戦へ共堀方新手に當られて御味方勢戦ひ疲れて

猪子石原の方へ引も有又は岩作の方へ行も榎原小平太は御

旗本の方へ引連て本田彦治郎康(72)重爰にて喰留られ危く

大に働七ヶ所を手負けり此時家康公は井伊直政を御旗本の

前備に御定め御直衆御馬廻り衆と三ツに分て御軍例御定

被成信雄衆も右の跡に付備けり地理見分として内藤四郎左

衛門高木主水富士根の地形を見巡り敵間の様子を見積り其

跡へ渡辺半蔵大久保治衛門も又見積りに参る時二内藤高木隼

歸御先手衆三好勢を追崩しへ共堀久太郎方備に行当り只

(73)今立崩れ敗軍の様子に見え候敵勢の一所に不成内に急に

富士根へ御歸り敵之間を御取切被遊候わば御勝利成へし

と申上る本多佐渡守云御先手敗軍を致候らば御旗本斗にて

は前後に敵を引請いか八可有哉と申さる所へ渡辺大久保隼

歸り内藤高木が申上たる旨同断(同様)に申上る故御前備

井伊直政富士ヶ根近く押出し玉う斯て堀久太郎は勝に乗して
槍ヶ根近に陣を移し東北の方を見れば色金山に金の扇の
御馬印朝日に輝き見へければ敵方俄に騒ぎ立思ひよらざる事な
れば逃る様子に崩れ立秀政士卒に下知してはげませども崩れ立たる
士卒とも思ふ様も成難く家康公に道きられて前後に敵を請ては
叶うまじとや思ひけん直に是方退きけり

一、池田勝入父子森武蔵守は後陣に軍有と聞て取て返し
佛ヶ根に備をたつ勝入が先手を香桶山迄押上丑寅(北東)
に向ふて鉄砲を構う(75)此時御身方御旗元の前備井伊萬千代
(丸)直政はかつけ川(香桶川)の堀に張出し備をかた免鉄砲を揃
えて迫合始る処池田方の鉄砲は幸より谷へ打於路す鉄砲なれば
皆献矢(無駄打ち)になる御味方はむなしに(難なく)当る故に敵色
免き立つ所へ色金山より家康公の御旗御馬印押し玉えれば恐

津るべうちか満くり打にうつへし其方共は何れも申合せ雨池より
下りて備よ阿をり打にうつへし兼て其方が(78)家に阿る事なれば阿
をり打は少様成る所なりと上意阿り直に十六人申合せ二百
挺の鉄砲にて備ければ武蔵守長可は雨池より余程下へ紅地権
右衛門を先としていさみすすんで見えたり長可は五輪のさしもの
(旗指物)に白羅紗の陣羽織に白月毛の馬に打乗て士卒に下知して
はげましてかけまわる井伊備より三百挺の鉄砲を入替えく打立
る雨池の備よりは二百挺の鉄砲阿を(79)り打に打立る時に何れ
より打たる事か武蔵守方眉間に当たり武蔵守は上方にて鬼武蔵
と呼れし勇将なれども痛手には是非もなし馬方下へ莫さかさまに

組に柏原与兵衛打ち落したりとい諸人突ける時に何者共知れ
ず武者武蔵守を肩にかけて逃る者阿り本多八蔵跡より追懸る

阿わて、我本陣へ崩れなびく敵を追立御先手は前山へ押出家康公
は富士ヶ根へご本陣を移させ玉う御前(76)備衆は切通しを通り
移森方備に当て備玉う既亭合戦始て鳥井金治郎・平松金
治郎志番鍵を争う所に家康公前山へ進み玉う(古は有
畑山といは是に御馬を立られし故に今御馬立山といふ)此節今朝
敗軍の御味方集りける森武蔵守御旗本を目懸近寄りんとする
ところいいなおまおんあずか(77)渡辺弥助本田佐渡守布施源兵衛
水野太郎作大久保治右衛門(77)わたあやすけはんださどがみふせげんべえ
ひさながげんべえもりわかきんえもんないとうじんえもんしまだほるべえかとうかえ
もんかみややこすけたがききゆうすけひみしんうえもんさかきほじゆうべえにわか
衛門神谷弥五助高水九助水見新右衛門榊原十兵衛丹羽勘
助右勘助を御呼遊ばされ候て井伊は備を立たるやと御尋
遊し候に付武蔵野守に当て備え申され候と申上る定て

間近くなれ(80)ば捨置逃行けり八蔵則首を取引提見れば眉間
に鉄砲の穴阿り是は実験に持参したりとも飛ろい首(拾い首)といわ
れんと思案し幸い今日は首取に不及と阿れば鼻を楚ぎ候て腰に
金銀を以て鶴の丸の紋津くし付けたるさずの有を取て御旗元へ持参
す其跡へ武者一人馳来り武蔵守の死骸を見て走り寄五輪の差物
取捨(81)て白羅紗の陣羽織を引免くり楚ばなる首を引包み我力鎗
にくり付武蔵守の捨たる馬に飛乗井伊の備の前へ懸来り鬼武
蔵といへる大將を我言人して討取りたりと大音聲を揚て是見よや
是見よやといひ奈がら乗廻る定而実験へ参るなりと思ひ実験の場所
は方角違いと呼懸れども兎角不聞入乗通りける後日に聞に(82)森の
小姓に田中何某といふ者にて金山へ持参す柳家康公後に被聞召
武蔵守の首を味方へ取たるより敵へ被取候首を(森の小姓が)
取かへすは莫大の高名と御誉有けり蜂屋七兵衛は弓を持来り

おはたもとじゅう やりは わがゆめ いこ もつて そのときやいれ と
御旗元衆へ鍵八はやく我弓を射込申廻し其時鍵入られ与といへ

ども鳥井金治郎平松金治郎壹式番の鍵を入られ高名す勝入は
むさしのかみ つちじ きまたに おしあげ おはたもと かげたりい い もり
武蔵守が打死を聞谷を押し上げ (83) お旗元へ懸来り井伊は森を

討捕たる 勢に備を立直し勝入に向ひ散々に相戦う家康
こうらんあり てき しぞつひつとこう さもほろむしや て
公御覽有て敵の士卒一所に指物母衣武者の出がたきは能者と
ておい み じふん よきぞかかれ さいはい と おんげちあ

手負たりと見へ時分は能楚掛れやと 摩をおん取り御下知阿れば
おのおのやり い ながいぜんえもんたかぎぜんぞえんひみしんえもん
各鍵を入らるる永井善右衛門高永善左衛門水見新右衛門
ひさながげんべえさはしきぎいむらげんすけはさかよさぶろうもりひくろうにおいさかしち
久永源兵衛佐橋作吉今村漸之助保坂与三郎森彦九郎句坂七

平閑 (84) 重平柴山弥作小田切嘉兵衛菅沼藤藏重井新太郎
おおくはしんばちうおおはしさまのすけかひかんえもんどうしのすけないとうしんごう
大久保新八郎大橋左馬之助寛勘右衛門同牛之助内藤新五郎
まらだいらかえもんたかぎぜんじうおおくぼしんじううわたなえろくぞえんもんどういろく
松平賀右衛門高永善治郎大久保新十郎渡辺六左衛門同平六
あへやいちうなるせこさちこみとのもわくぼしんじううよねつせいぞえんもんまらだいら
安倍弥市郎成瀬小吉五味主殿川窪新十郎米津清左衛門松平

助十郎は鍵様の弓を射る各高名す此時井伊直政も勝入
すけじゅうろう やりよう よあ い おのおのさみまう このときいいなあさま しよにけう
に付母衣を (87) 開みれば法師首なり是はと母衣を見れば池田信輝
につきほろ ひらぎ ほうしゅくひ これ ほろ み いけだのぶる
入道勝入と有を見て何れも皆々是楚誠に今日の大寺番と營
にゅうどうしんじう あり みていずれ みなみなこれまこと きょう おおいちばん ほめ

にける勝入家臣秋田嘉兵衛樞浦兵七郎片桐与三郎武村小平
しやうにけうかしんあきたかへいかじうらへいしううかたきりよさぶろうたけむらこへい
たとうみなちじ みかた みずのとうじううわたなえんあまのさぶろうへい
太等皆討死す味方にて水野藤十郎渡邊半蔵天野三郎兵衛
なるせこさちあくりまたいちちやしちへえこんたこさぶろうおのおのま のりいれこうみまう

成瀬小吉小栗又市蜂谷七兵衛権田小三郎各馬を乗入高名
なるせこさち (88) 敵と鍵を合飛込て引組敵力まさりて小吉(を)
す成瀬小吉は 敵と鍵を合飛込て引組敵力まさりて小吉(を)
あをのけに取て押へ首をかかんと腰刀に手をかけしを小吉下方ぬか

せじと双の手尔天きうて越尔ぎ里彼是もミ合ける所へ小吉力
せ もろ てにて らに りかれこれ みあい とろ こさちが
鍵持彦左衛門と云者馳来り敵の鍵を取て敵の腰より脇ばらへ突通し
やりもちひごえもん いづもはせきたりてき やり とつ てき こし わき つきとおし

是てもはなさぬかたと上こじ阿げければ其儘小吉は下よりはなかへし首
これ うえに あ そのまほこさち しだ
を取米津清右衛門は敵 (89) を馬より突落す所へ味方の者来りて是
とろねきせいえもん てき うま つきおと とろ みかた ものきた これ
を切相討なりといふ清右衛門云う其首汝に取らするといいて又

敵中へ馳入能首を取てかえる勝入方嫡男紀伊守之助は朱
てきちゅう ばせいりやくへい たり しやうにけうのちやくなんきいのかみりきすけ あか

のくるほろ むしや ひきくみあんどごへえこれ み やりと なあ い とろ
が黒母衣の武者と引組安藤彦兵衛是を見て鍵取り直し居る所に
なあまなく かつひ と ひこへえあんど とあ
直政組み勝首 (85) を捕る彦兵衛安堵して通りける敵も色めき敗軍

す味方は氣を得て急に攻立ければ勝入も最早討死と定め母衣
ものさんじうごんばか ゆしうれ み くらいつり よろい ずなりかかと ちやくし
の者三十人斗り召連その身は黒糸綴の鎧に頭形甲を着
じうごんじ やり もてまんざん たたか にかしよかて おうあいたが つわもの
十文字の鍵を以散々に戦て式所深手を負相隨う兵ども

或は手負或は討死勝入も今ははや疲れて婦き(露)畑の畔に
あらい ておいあらい うちじすしうにけう いま つか ふ ふき ばたけ あせ
腰を懸吐息を突て居る所へ安藤彦兵衛馳来り鍵を合候 処へ
こし かけといき つき いるところ あんどうひこへいはせき やり あわせどうろうとろ
永井 傳八郎馳来り後へ廻り勝入を突とはや傳八郎後より
ながい てんばちうはせきた こ まわ しやうにけう つく てんばちううしう

組付とりて押けるを見て彦兵衛は其場を馳通りける傳八首を取て
くみつき おし みてひこへえ そのば はせとお てんばちひ ちう
見れば法師首なり是はと母衣をはつし見れば池田信輝入道
み ほうしゅくひ これ ほろ み いけだのぶるにけうとろ
勝入と阿れば直に太刀も取添えて突候へ持参し伝八云今日の
しやうにけう あ すく たち とりぞ じげん じさん てんばちうきう

一番首と申て差出す何れも一どつ笑けるは今持参して一番とは
いちばんこもつし さした いす うち わら いまじさん いちばん
如何最早何十番と申也傳八聞て先母衣を開きて見られよと云
いかかもはやなんじうばん もうすなりてんばちきき ますほろ ひら み
如何最早何十番と申也傳八聞て先母衣を開きて見られよと云

具足を着して粟毛の馬に乗て白熊の麿を持敗軍に引かれ退け
くどく ちやく くりけ うま のり しろうま さいはい もちはいけん ひ しりぞ
るが勝入を心元なく思い乗廻しける所を安藤彦兵衛脇より
しやうにけう こころもと おも のりまわ とろ あんどうひこへいわき
飛んで出鍵を合終に馬より突落し首を捕る時に生年 (90) 廿

六歳三左衛門輝政は大草に残して被置と勝入被申けるを押
ろくさいさんぞえんもてるまき おおさき のこしておかれ しやうにけうもつされ おし
大草には人数を付幡野与三郎を残し置少人数にて勝入の先
おあさき にんずう つけはたのよさぶろう のこしおさしうにんずう しやうにけう さき

手伊木片桐の勢へまじわり岩崎まで押行けり然る処に勝入は長
ていぎかたきり けん いわさき おしいき しかとろろ しまにけう なが
久手に合戦はじまると聞て備を長瀬へ被戻ける輝政は岩崎島井ヶ原
くて かつせん きま なかくて もとされ てるまき いわさきとりのいがはら

の段に備を立待請の時に武蔵守勝入敗軍と聞得ければ伊木清
だん ぞえん たてまちうけ とま むさしのかみしうにけうはいけん きこえ いぎけん
兵衛輝政の前へ出て (91) 御備を長入手へむけられてこ一戦可有と
へえてるまき まえ て おんぞえん ながくて いげんあるべく
申しければ片桐半右衛門近に出其儀只々御無用多るべしとて

片桐伊木に向ひ此輝政においては永々大団をも領せらるべく
かたきりいぎ むかいこのころまき すえすえたいく りよせ
御器量なり只今長瀬へ御備を出され候 其中々御勝利は
こきりよう たたいまながくて おんぞえん た そつうとまながかこしうり

難成誠に御家の滅亡なり我等了簡には是より大山へも御寄な
なむがたまこと おいえ めつぼう われらりうけん これ いぬやま おより

直に御帰国遊され當時(暫く)御引籠時節見合被遊候

わはば是御家の御繁栄は鏡に懸て見が如し(92)先達而伊木殿の御

了簡にて今日君の不覚出来たり無念なることかなとて眼をいからし

既に伊木と差違も可致気色にぞ見へければ輝政被申けるは

片桐申ても最早せんなし事也兎角其方が申ここと今暫くも

早々引取へし若此上長居して三州より家康公の人数参るまじく

も難斗と申されければ何れも片桐の了簡宜敷岩崎より高針へ

出夫より出国をして引取ける(93)はたして後には大國を領せられ天

下に何人と申大祿の内へ入今に致る迄繁栄す是片桐といえる

智仁勇の臣家有故なり勝入先手に池田丹後守(教正)は味方敗軍

にもかまわず戦しが勝入父子森討死と聞て人数五拾人斗

引退く廻大久保七郎右衛門嫡子新十郎追懸行既にまちかく

成し廻にいか志たりけん大久保左の鎧を踏はずし乗直さんと

する所へ(94)馳来り大久保が揚巻の下を鎧にて突ければ大久保

深田の中へ阿おぬきに突落され中々起上りがたく色々とするを見て

敵申様其方が様成青口ぼし(若輩者)の首は入用になし我

三好の臣土肥権衛門といふ者也今朝我馬を用立て是まで歩立に

て殊外疲たる故此馬を所望也竟に被起よさらばくと云て双

鎧を合せて落行ける大久保が家来(95)漸馳来り鎧を差し夫に

取付田より上る水にて具足洗い帰らんとするに土肥鎧を捨置たり

其鎧を拾ひ歸りけり家康公の御前へ罷出て右の様子を申上けれ

八家康公被仰けるは馬も大切成者なり鎧も大事の道具なり五分

くの替事也

一、黒田之城主澤井左衛門見廻りに参る君御覽被遊大事成城を

預り何とて来ると被仰る(96)沢井申上るは城は家来共に堅固

に申付置余り御心元なく奉存故参上仕候と申

上る故御機嫌よく御褒美也其外神原を始敗軍之諸勢も追々

来りて一つに成戦此時之一番鎧は水野太郎作二番鎧は神谷

弥助三番は大久保治右衛門其外何れも追付尔高名す長追をし

て既に小幡へ御入を知ら須小牧へ参るも多かりける内藤四郎左

衛門申上るには秀吉公は手早き(97)大将なり若大人数にて

押来らば味方は戦に疲たれば早々小幡の城へ御入可然と

申上る故佐渡守も尤成義と申上早々御引被遊ける四月

九日未明に合戦始り同日八ツ時小幡城へ御入也同日未の

刻秀吉公御本陣は樂田三好勢敗軍の御注進有之廻追付

池田父子武蔵守長入手にて討死の注進を聞て驚玉い急に螺

(法螺貝)を吹て砦に有之勢は城を能守遍し(98)其外は打立へしと

触れけり一番螺に先勢早押し御馬印の瓢を押立て拾六番末

て出られ玉う御出馬の道は落ち武者引も不切龍泉寺に至て

扱々て家康公は智仁勇の良将なりと大きに感じ玉う

(101) 一、小牧之留主酒井石川本多は樂田の方を見て俄に騒しく

人数段々に南東の方へ走り行扱は秀吉公出勢被致候哉と

聞合候へば彌出陣也其時長久手より御勝利の注進申来

る時に左衛門は人数を呈し敵を二当阿る通しといふ石川申けるは

小牧を引拂ひ出て若討入に逢候ては却て害を求む通しと止む

平八は今朝梶金平を便に遣し候へども今に歸らず兎角

心元なく候 問參るへしといふ石川は御勝利の注進有行事は

有満じと留候 得共秀吉公出陣被致候 問 心元なし若も

君に道にて行逢被成候わば大事なり其時討死を極め大軍へ馳入

戦わば其内には岡崎へなりとも小牧へなりとも御越被成通し是非

可參と三百余の勢(軍勢)にて罷出秀吉公は大草の方へ

は行玉わず浅宮海道を平押に急玉う所に原内にて平八に出合

(103) はや鉄砲を二二三打懸候へば秀吉公の先手さわざ立鉄砲

打やむ処を秀吉公のび阿がり士卒へ使を以て制したまい渠力様な

る鉄丸の敵には構わぬ物とて誰なる輩と御尋有はたして

勝川より引王かれ小幡の城へ急ける梶金八漸く歸り本多に行逢

ひ何とて延引致たるやと 尋ければ長瀬まで参り候 志るし

無御座候故戰場へ罷出敵と 戦高名 仕 罷歸り候

と申けり

一、小幡の城にて今日諸勢の高名御吟味 仕 候様と大久保

次(治)右衛門渡辺半蔵へ被仰付二二二吟味 仕 候 得共

其日はとくと相知れ不申翌日に至る具々相知れ申 候 先鳥井

平松壹式の鍵の論有之候 廻鳥井が申には平松今日一番を

心懸せき申故 (105) 某も平松に被越申問敷と随分心懸鍵

申されけるは其方の人数の遣い方 承 及ぶ此節所望也見物

致度と有ければ相心得 則乗出し龍泉寺の下も川村の北高山

へ士卒を上げ秀吉公引取し残兵へ鉄砲五つ六つ打かけ 候へば敵

は騒ぎ立行色ゆめき申やいなや 馬上にて乗込申候節長坂

長治郎何とかして馬を放し敵の方へ馳入る其馬を平八乗付鍵の

石突にて手綱をくるくると巻きければ長治郎早速駆付て打乗敵の

方へ馳入て高名す手勢をくるくると下知して引まとい諸勢を引取

此時本多小三郎高名す信雄見玉いて扱々貴殿の人数の遣ひ

様聞しに増りたり定に川の魚を網を引廻し取るが (109) こととして大

に譽めて保生五郎の刀を賜けり

一、秀吉公樂田に歸り玉いて諸勢も 弥進み不申兎角此上は信

雄をすかして私談すべしと思いて小牧山へ向城を取りていれ置歸るへ

しとて奈良高田(河田)に長谷川藤五郎稲葉伊豫守一鉄二重堀に

扱々て家康公は智仁勇の良将なりと大きに感じ玉う

(101) 一、小牧之留主酒井石川本多は樂田の方を見て俄に騒しく

人数段々に南東の方へ走り行扱は秀吉公出勢被致候哉と

聞合候へば彌出陣也其時長久手より御勝利の注進申来

る時に左衛門は人数を呈し敵を二当阿る通しといふ石川申けるは

小牧を引拂ひ出て若討入に逢候ては却て害を求む通しと止む

平八は今朝梶金平を便に遣し候へども今に歸らず兎角

心元なく候 問參るへしといふ石川は御勝利の注進有行事は

有満じと留候 得共秀吉公出陣被致候 問 心元なし若も

君に道にて行逢被成候わば大事なり其時討死を極め大軍へ馳入

戦わば其内には岡崎へなりとも小牧へなりとも御越被成通し是非

可參と三百余の勢(軍勢)にて罷出秀吉公は大草の方へ

は行玉わず浅宮海道を平押に急玉う所に原内にて平八に出合

州笠間にて五千石被下置其後下総古河にて七万石領す

一、池田紀伊守之助(生年廿六才)首は安藤彦兵衛直次(父

は重之助御旗奉行にて味方ノ原にて討死す)此度紀伊守之助首を

とり後御使番駿府御用達夫より頼宣卿(家康拾男)御附元和

三年遠州掛川にて三万石賜り同五年紀州田辺にて三万

五千石賜る

(119) 一、森武蔵守長可(生年廿七歳)首は始は本多八蔵捕

といへとも首なし故井伊直政の家来高名に相極りたり至れども米

沢左右衛門加藤嘉右衛門波辺弥之助是三人は天野三郎兵衛と

一所に働高名す初鹿傳右衛門三宅弥治兵衛三好秀次御先

手と合戦の時高名す三宅一番首と上意阿りければ私より少

々先にて傳右衛門高名仕候得共当時御勘氣(おとがめ)に

候故差扣(120)罷在候由言上す則御勘氣御免有て御前

こみうどのあやへえなげしんごうはさかぶらうむかいしへいしばたまぞく

五味主殿阿部弥兵衛内藤新五郎保坂与三郎向井七平柴田孫作

おだざりかへいすがぬまどうぞうわたなへへくわほりしんじりうなぞなり

小田切嘉兵衛菅沼藤蔵渡辺平六川濠新十郎等也

一、勝入黒母衣の者と組討高名井伊兵部少輔直政一番鑑

三浦与衛門二番鑑中村与兵衛其外高名十二人也(123)高木主

どけらい はないげんたろうごみまう のぶかつぎまうしうごみまう むらせさまのすけ

水家来にて花井源太郎高名す信雄卿衆高名は村瀬左馬之助

牧野勘八郎牧野傳蔵丹羽佐平太林藤十郎長谷川弥八沢井

左右衛門家人の高名は久保勘次郎加藤主膳柳橋甚吉沢井

左右衛門は黒田の城お見廻りに参る時にも働有沢井は志満

三千石領す

一、御家人討死 七拾余人

一、信雄衆討死 式百四十余人

(124) 敵を五将にて討捕し首数式千七百余人秀吉公龍泉寺を

引退たる朋勢三百余人追打首数合て三千余也四月九

へ被召出一番首と定る内藤紀伊守(十七才也)君小幡へ

御帰の道にて小幡藤十郎を頼み私今日初陣にて御座候首一

つ取申候由言上す君此時は其なり翌日小牧にて被召出委細

おたすねごほしう おんじものはいりき あおやまたらうろ きのしたかげゆぞ

御尋御褒賞に御腰物拜領す青山又六郎は木下勘解由左

衛門が首を取る梶金平は本多平八家来にて使に來り高名す

波辺半蔵は敵七人(121)突殺内老人は鑑を突折し故太刀打になり

切伏家来の内山内嘉右衛門首を取小田切彦十郎長久手田尻に

て勝入方勢逃崩立時矢を射懸働申所を君御覽被遊

おだざり 世に た ゆめい じよいありこのほかはたら これあるしちゆう もの

小田切が精を出して弓を射ると上意有此外働き有之衆中(者

達)は波辺六左衛門高木甚左衛門松平助十郎大久保新八

郎服部半蔵三橋佐吉成瀬慎太郎坂部又十郎関金平鶴殿

兵庫鳥井准之助高木善治郎大岡傳蔵布施孫兵衛大岡

久蔵久永清兵衛鳥門傳八内藤甚五右衛門永見新右衛門

日長瀬村の合戦はまでに終るや

一、秀吉公八濃州加の井の城主加の井弥八を賣落し夫より

竹方鼻の城主不破源六を攻不破防兼て降参して城を明け渡

し尾州へ迎候

一、尾州蟹江の城より信雄家臣佐久間駿河守正勝(125)を守ら志む

る所信雄佐久間に命じ勢州蒲生に砦を築蟹江の城を前田与

十郎に守らせ下市場の砦は前田の舎弟与平治を置前田の砦に

与十郎の息甚七郎大野の城は山口長治郎を据へ守らせ佐久間

は勢州へ行滝川左近将監一益は信雄の家臣にて一度は関東の

管領に成しが信長公御生害の後歸りて長嶋に在城し信孝勝家

と一味して秀吉公に背(126)信孝滅亡の後秀吉公へ降参し至れど

も長嶋の本領は没取せられ越前大野に流浪す秀吉公滝川の

武勇老巧を惜み勢州神戸にて三千石賜ける今度信雄と一起

はたらくことがないがたくになすう ひきとり たまうくんひてよしうせしう になすう だ
働事難 叶人数を引取らせ玉ふ秀吉公勢州へ人数を出さ
ん事も斗りがたく信雄殿は是より長嶋へ返らるへし我等も休息
いたす おかきき こきんあまはされじんば やすめたまう
致へしとて岡崎へ御歸陣被遊人馬を休免玉ふ

(136) 一、十月六日秀吉公勢州へ出勢し羽津に陣し蒲生飛騨守に名
穂生の城を守らせ蜂須賀彦右衛門を(に)花部(桑部)の城を守らせ
けり時に信雄も長嶋より桑名迎に出陣有ければ秀吉公ケ様に
とりあ、いつはてるへ
取合て何時果へきも知れず其上家康公の加勢有故早速勝利もせ
とにかのぶが、わはく、ちゅうぐんざいごとも、おさめ、そのこ、しよつ、ある
ず兎角信雄と和睦して中国西国共に治て其後は仕様も有へしと

(137) 一、思案し玉ひ富田左近津田隼人を以申遣しける某事信長
公の厚恩を請る事深き故少も敵対の心なし明知光秀を討て後
柴田滝川我を妬む故信孝信雄卿を進めて某を亡さんと
申故に信孝滅亡せられ信雄卿には前々のごとく志たく被成
下候 様にと色々す可し被申れば富田津田尤と同じ則信雄

一、丹羽勘助濃州岩村の城を賜りし事関ヶ原御陣氏次嫡子
式部少輔氏信軍功に依て(140) 初免參州伊保之城主たりしを岩村
の城を賜り此城と申は初免森武蔵守長可舎弟森爾丸長定の
居城なりしを田丸氏に賜 其後松平和泉守に賜 其後氏信へ
賜今氏信の嫡子氏定の代なり

承応二年癸巳九月吉日

於濃州岩村の城

丹羽次郎佐衛門源氏之 写是

ながくてかたせん、とうねんまてしちじゅうねん、あひなりあつげひやくねん、おまひどつら
長入手合戦は当年迄七拾年にも相成追付百年にも及び候わ
ば色々の説を集めて重書にも可被成此外は皆虚説と知るべし

脚へ参り足立清右衛門を以右の様に申けれ八信雄何の隙もなく
承知 有之早々使者は歸りけり秀吉公聞給ひて大に悦び
十一月十一日勢州町家川之上矢田河原三互 対面有之秀
吉公は手を突頭を下げ涙を流し太刀一腰献上して歸らる、
一、柳市助堀尾茂助に命じ尾州表の人数早々引取て犬
山城を信雄に渡して大坂へ歸陣し玉ふ両方之諸將軍勢久々
戦場に苦勞せしが各 悦び歸陣す

(139) 御越有処
一、家康公八秀吉公勢州へ出馬有由被聞召清須へ
信雄より何之御相談もなく和睦相済され候 故早速濱松へ御歸
陣し玉共石川伯耆守を以両方へ御悦びの御使者被遣ける
秀吉方にて御使者程々御馳走有て懇意之挨拶有て家康公八
此以後御入魂被成下様にと仰られ御使者は參州へ歸けり

(142) 氏次旗無紋紺に白筋達二筋 差物同断也
加藤忠景天衝の指物如此也

原書頁一四二参照
原書頁一四二参照

丹羽水野 一千余騎 井伊 一千三百余騎
御前備 一千余騎 御旗車 七百余騎

(143) 天正十二甲申四月九日尾州愛知郡岩崎の城へ寄手の敵將
は池田勝入輝政親子森武蔵守長可也池田の先手片桐半左
衛門伊永清兵衛式手の人数を以攻寄る城 中の大將丹羽次郎
氏重 甚 拒み雖敵下大勢を以終に氏重数ヶ所の手負其後鉄

ほう あたりうちじに
砲に当り討死す

並 郎党戦死の人数

大將丹羽次郎介氏重

氏次第 十七歳傍示本村の領主紺
糸綴の鎧葦毛の馬に打乗門外にて敵

四人突伏せ鉄砲に当り終に死す

長久手村の領主氏次妹婿也岩崎の

(144) 加藤太郎右衛門忠景

当主を預り討死す白糸綴の鎧月毛の馬

に打乗天衝の指物大身の鎧にて大に働

討死

丹羽傳七郎丹羽四郎右衛門丹羽善七郎丹羽勘六郎丹羽内蔵助
丹羽弥太夫今井七右衛門(元武田信玄之使番)須賀四郎右衛門
須賀六蔵立猪理右衛門鈴木太郎助林市蔵新藤久蔵森傳

丹羽勘助氏次小牧山御陣御供の節人数の覚

丹羽平左衛門 供貳拾人 (鉄砲三挺弓二張鎧志筋)

大野三平 供七人 (鉄砲二挺鎧志筋)

水野弥五郎 供八人 (鉄砲志挺鎧志筋)

水野甚右衛門 供七人 (鉄砲志挺鎧志筋)

(147) 村上平六 供六人 (鎧二筋)

長瀬久八郎 供八人 (鉄砲一挺鎧一筋)

宮地三郎兵衛 供五人 (鎧一筋)

牧久蔵 供三人 (弓一張)

高瀬平太 供六人 (鎧二筋)

河村与三郎 供六人 (鎧二筋)

原田弥次郎 供五人 (鉄砲一挺)

次郎加藤藤左衛門今井小右衛門鈴木五郎左衛門鈴木百蔵柴田
喜八郎牧源四郎今井助八郎武谷又助中島与七郎 (145) 後藤乙

山本市蔵丹羽左門二郎丹羽孫作今井四郎三郎鈴木助蔵山村
金蔵鈴木久太郎鈴木源次郎武谷十郎兵衛中南弥十郎
(伊勢彌宜慶徳藤太夫の甥也)

四拾志人

右の外足輕六十人弓の者三十八人中間又者七拾人岩崎
の町人三拾人死す都合人数二百三拾九人死す

(146) 八十八人死す此内に池田の旗指はるか

御預け申故此節障なく城内に女志人もなし

寺西三太郎 供十三人 (鉄砲二挺鎧三筋)

鈴木平六 供五人 (鎧一筋)

与語半助 供貳人 (鎧一筋)

二村新助 供貳人 (弓一張)

河井小助 供三人 (鉄砲一挺)

水野又十郎 供三人 (鉄砲一挺)

春田甚右衛門 供三人 (鉄砲一挺)

古橋嘉兵衛 供六人 (鎧二筋)

二宮忠蔵 供三人 (弓一張)

(148) 篠宮市平 供五人 (鉄砲一挺)

土肥源蔵 供三人 (弓一張)

牧野甚助 供六人 (鎧二筋)

上下百五十八人

肝煎

すずきよしげえもん ともちねん (鉄砲三挺弓二張鍵志筋)
 鈴木吉左衛門 供八人
 すきはらげんじろう ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 杉原善次郎 供七人
 すきはらきゆうえもん ともちねん (鉄砲二挺鍵三筋)
 杉原久右衛門 供十人
 いのうえくさえもん ともちねん (鉄砲一挺鍵二筋)
 井上六左衛門 供九人
 みずのせいぞう ともちねん (鉄砲一挺鍵二筋)
 水野清藏 供十人
 おはせいしちろう ともちねん (弓一張鍵一筋)
 尾葉勢七郎 供六人
 みずのきゆうく ともちねん (鉄砲二挺鍵一筋)
 水野久六 供八人
 かとうけんえもん ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 加藤傳右衛門 供七人
 おはこさぶろう ともちねん (鍵一筋)
 尾葉小三郎 供五人
 かにいげんじろう ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 蟹江源次郎 供七人
 あまのやこはち ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 天野弥五八 供七人
 おおとねごろうすけ ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 大曾根五郎助 供七人

みずのけんじゆう ともちねん (鉄砲二挺鍵三筋)
 水野傳十郎 供十人
 まきやいちろう ともちねん (弓一張鍵一筋)
 牧弥一郎 供六人
 かとうくえもん ともちねん (鍵一筋)
 加藤六右衛門 供六人
 しはたけんえもん ともちねん (鍵二筋)
 柴田権右衛門 供六人
 ほんだせいぞう ともちねん (弓一張)
 本多清藏 供四人
 しもかたごうしちろう ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 下方宗七郎 供七人
 かとうけんじゆう ともちねん (鉄砲一挺)
 加藤甚十郎 供四人
 うめむらじんすけ ともちねん (弓一張)
 梅村仁助 供式人
 いんたきんすけ ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 生田金助 供七人
 すずきはんじろう ともちねん (鉄砲一挺)
 鈴木半次郎 供三人
 かとうこいちろう ともちねん (弓一張)
 加藤小一郎 供式人
 うらのやはちろう ともちねん (弓一張)
 浦野弥八郎 供三人
 かとうまじろく ともちねん (鉄砲一挺)
 加藤孫六 供式人

(150)

おくらやじない ともちねん (鉄砲二挺鍵三筋)
 小倉弥次内 供七人
 てらさわきゆうごごろう ともちねん (鉄砲二挺鍵三筋)
 寺沢久三郎 供十人
 えはらひざじろう ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 江原久治郎 供七人

(151)

しばたひこじゆう ともちねん (鉄砲一挺)
 柴田彦十郎 供五人
 ながしまきんぞう ともちねん (弓一張)
 長嶋金藏 供五人
 ふなすやぞう ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 船須弥惣 供八人
 つねかわやざえもん ともちねん (鉄砲二挺鍵三筋)
 常川弥左衛門 供十人
 むらかみちろう ともちねん (鉄砲二挺鍵三筋)
 村上忠次郎 供八人
 わかおしじゆう ともちねん (鉄砲一挺)
 若尾勝八郎 供四人
 はせがわとくぞう ともちねん (ゆみひとはり)
 長谷川徳藏 供七人
 なにかわよきちろう ともちねん (鉄砲一挺鍵一筋)
 梶川与吉郎 供七人
 もりよいちろう ともちねん (鉄砲一挺)
 森与一郎 供三人

肝煎

にわはんさえもんげの宗 ともちねん (はたいばんらぼういちちゆうゆみさんばり)
 丹羽半左衛門茂信 供三十五人 (旗一本鉄砲五挺弓三張、
 鍵二筋)
 みずのきゆうえもん ともちねん (鉄砲二挺鍵四筋)
 水野久右衛門 供十三人
 すずききゆうじろう ともちねん (鍵志筋)
 鈴木久治郎 供五人
 いわもとひしろう ともちねん (鉄砲一挺鍵二筋)
 岩本彦四郎 供八人
 よしださんへい ともちねん (鉄砲一挺)
 吉田三平 供五人
 こんどうしんすけ ともちねん (鉄砲一挺)
 近藤新助 供五人
 かとうきゆうざえもん ともちねん (鉄砲一挺鍵二筋)
 加藤久左衛門 供八人
 かとうやぞう ともちねん (鉄砲一挺)
 加藤弥藏 供三人
 まきじんじろう ともちねん (ゆみひとはり)
 牧甚治郎 供六人
 やぎよじゆう ともちねん (弓一張)
 八木与十郎 供五人
 かとうしちろう ともちねん (鉄砲一挺)
 加藤七藏 供五人

じょうげにやんじゆうよん 上下式百五十四人

田中曾婦右衛門 ともむねにん 鐵砲一挺、鑓三筋
 田中忠右衛門 ともむねにん 鐵砲一挺、鑓一筋
 河合定助 ともむねにん 鐵砲一挺、鑓一筋
 成田彦七郎 ともむねにん 鐵砲一挺、鑓三筋
 井上源左衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 河井右衛門吉 ともむねにん 鐵砲一挺
 中村与六 ともむねにん 鐵砲一挺
 林藤藏 ともむねにん 鐵砲一挺
 田中又助 ともむねにん 鐵砲一挺
 杉浦金藏 ともむねにん 鐵砲一挺
 横地新三郎 ともむねにん 鐵砲一挺
 柘植弥藏 ともむねにん 鐵砲一挺
 佐々井六藏 ともむねにん 鐵砲一挺

竹山助六 ともむねにん 鐵砲一挺
 松下喜右衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 吉田五右衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 山田甚左衛門 ともむねにん 鐵砲一挺、鑓一筋
 加藤藤七 ともむねにん 鐵砲一挺
 牧金十郎 ともむねにん 鐵砲一挺、鑓一筋
 牧藤太 ともむねにん 鐵砲一挺
 三宅吉治郎 ともむねにん 鐵砲一挺
 中野小太 ともむねにん 鐵砲一挺
 今井小八郎 ともむねにん 鐵砲一挺
 竹屋藤藏 ともむねにん 鐵砲一挺
 寺沢弥三郎 ともむねにん 鐵砲一挺
 成瀬助三郎 ともむねにん 鐵砲一挺

水野小五郎 ともむねにん 鐵砲一挺
 原芝助太郎 ともむねにん 鐵砲一挺
 日野助左衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 青木九藏 ともむねにん 鐵砲一挺
 加藤孫六郎 ともむねにん 鐵砲一挺、鑓三筋
 近藤彦左衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 新美小五郎 ともむねにん 鐵砲一挺
 牧久左衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 銀屋小平治 ともむねにん 鐵砲一挺
 磯谷行藏 ともむねにん 鐵砲一挺

前嶋全十郎 ともむねにん 鐵砲一挺
 古橋弥助 ともむねにん 鐵砲一挺
 大曾根七右衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 牧治郎右衛門 ともむねにん 鐵砲一挺、鑓三筋
 加納平藏 ともむねにん 鐵砲一挺
 富川又助 ともむねにん 鐵砲一挺
 岡田弥惣治 ともむねにん 鐵砲一挺
 服部理右衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 横地吉藏 ともむねにん 鐵砲一挺
 加納喜右衛門 ともむねにん 鐵砲一挺
 浅井六藏 ともむねにん 鐵砲一挺

(154) 丹羽金右衛門 ともむねにん 鐵砲三挺、弓二張、鑓一筋
 肝煎 ともむねにん

(155) 四組合八百九人、此内士分百十九人

そのほかいわさき うちじ ほんじゅういちじん
其外岩崎にて討死の士分四拾壹人

つごひやくむくじゅうにんじふんなり
都合百六拾人士分也

てんしゅうじゅうにこうしんしがこのから げこくよりたう げこくちかく いわさきじょう
天正十二甲申四月九日寅の 下刻方辰の 下刻近に岩崎城
らくじょうにわへいこうつ かちせん はじま じょうのすけうじしげ げち っり
落城丹羽平五郎は合戦の初るやいなや次郎介氏重の下知を受けて
じょうちゅうよりつ ことき きりぬきたけ やまのこし とお かめのむらもりやま
城中方打て出敵を切抜竹の山之腰を通り上野村守山へかけて小
まき は つげ つじつくせんで じょうごせん ながくてむらこ
牧へ馳せ付けらへども氏次先手 (156) として 両御前もはや長瀬村へ御
しゅじん き たたち ひ かえ ぐちお いわさきは らくじょう
出陣と聞きて直ちに引き返しけれども口惜しいかな岩崎八はや落城
のあとなり
之後成けり

めいれきにねんへいしんしがつ
明暦二年丙申四月

のつじゅういわさき
濃州岩邑において 丹羽治郎左衛門氏之

つじん
氏次

りんうふりつぎつれつれ あま ねに ぜんじいた かまつげあくなり
霖雨降 徒然の余り何かなしと存出し書付置也と阿り (157)

さんちゅうほごしんくほういげその どとしほ ほうのきまじり しぶ
三丁程西六坊池其はたに百々柴といふ朴木交りの志婦り(茂み)
あるこれ どの このへん かくるる かようなるしよふん こだち すえ いた
有是を百々といふ此辺に隠るよしケ様成少分の末立は末に至り
けさ もつすことゆえこうねん いたりこれなきせつ どとしほ いす ほしよ もつしがしん
消れ申事故後年に至り無之節は百々柴は何れの場所と申不審
ある
有へし

やぎこむらあんじよじ もつす せいよく ころみよさきまうたゆう たい しましう
一、岩作村安昌寺と申は永禄の頃三好左京太輔の代に致焼
いたじごえつ それ いおりどうきょう これありどうろうしかしながじごえつ のこり
失候 て夫より庵同様にて有之候 併 寺号は残
あんじよじ もつしどうろうしかるとわれらさいこんりゆう たはたならびにこやさんげん
安昌寺と申候 然 処我等再建立にて田畑 並 小屋三軒
ちりよぎしんしやうもんおしやう わたしおきどうろうならびにさんしやう
地領寄進 證文和尚に渡置 候 並 三将の (160) 法号も入置
どうろうすえすえ なりぞつら もつすべく ぜんねんなり
候 末々に成候わばなくなり可申と残念也

てんしゅうじゅうふんねんへいしんしがつ
天正十四年丙戌五月

これよりかく
是方副

さるころやぎこむらあんじよじ うじつふしんげん まい せつつかえ さるさる
一、去頃岩作村安昌寺へ氏次普請見分に参り 候 節歸りに去々
なれしやう おもいた じんば たちよりみもつすとさかればしよまがいか きすき
夏の難波を思出し陣場へ立寄見申 処 彼是場所間違塚も築
これあるゆゑのへん いもつすゆきしやう たすねくらえをもしよにうつちじ ぼしよ
有之故其辺に居申 百姓に尋候得共勝入討死の場所は御
ぞん とおりこが ふきばたけ せつろえともみぎ ば つかまきせきせつろ
存じ通 向の款冬畑に 候得共右の場へ塚 築 候ては今日の
つかみえ ひよう かか ことん うえ よ もつしどうろうすえすえ いた
費故(費用が掛るので)五反も上へ寄せ申 候 末々の世に至り
せつらわ かようなるころ むかし ふき ほんせつろ ひと ふしんもつす
候はばケ様成所に昔は款冬の生 候やと人の不審申へしとて
わいもつしどうろうまたむさしのかみ ころくたんした つかた
笑申 候 又武蔵守も五六反下にて塚立て (158) 申故是も其辺に
たすねぞつら これ ことしめいしんがとゆえこれ たて もつしどうろうすえすえ
て尋 候ははむくろの有之候 跡故是に建ると申 候 故我等笑
ちしどうろうむさしのかみてつぼう あたりらばいたしとせつらわ かけころくたんした
申 候 武蔵守鉄砲に当り落馬致処家来かたに懸五六反下へ
にげもつすあつ ほんたおいかけひ とりもつすゆえうちぼしよ ころくたん うえなりわれら
逃申 跡を本多追懸首を取申 故討死場所は五六反も上也我等
そのせちみもつすこと せつろつ もつ みなみなわらいせつろゆきすけかはみぎ うちじ
其節見申事に 候と申せば皆々笑 候之助塚八右の討死
ぼしよ ちがいもつすこれ われらみもつすせつとゆえし ぜんぜつせつろ
場所といつに違不申是は我等見不申事故志かりと不存候
このかあ いわさきじよげめ せつちやうにんひくしやうともあ
九日明け岩崎城賣の節町人百姓共阿わてさわぎ (159) 城より

ほうみまう づいしじょうたいこじ てんしゅうじゅうにねんこうしんしがつこぬか
法名 鐵圍秀公大居士 天正十二年甲申四月九日
もりむさしのかみながよし しよねんじよななだい かつどう いう
森武蔵守長可 生年廿七歳 勝蔵とも云
ちきいち かきあ ながよし ちち さんざえもんじよよしなり
長一は書阿やまりなり長可の父を三左衛門尉可成といつて可 (161)
じようじ いうてらありいまにいたるもりけ たいたいかのじ ちち わさしのかみぞく
成寺と云寺阿り今に至る森家にて代々可字を用ゆ武蔵守息なし
おくとらんまるりきまるぼうまるさんになあり さるさるとしのぶながかつおつし せつほんのうじ
弟 蘭丸力丸坊丸三人有しが去々年信長公横死の節本能寺
に みなうちじすこれにやう すえのおととせんまる もりたたまさ あにむさしのかみがあつと
二て皆討死入是二依て末之弟 千丸(森忠政) 兄武蔵野守方跡
やりうこんたゆう いうみまさかのつやまじよしゆにてじゆうはちまんとく じよようす
を 鍵右近太夫といふ美作国津山城主三十八万石を 領入
げんぞくじゆうちねんりやうちげんじまにまんとくほんしゆあかほのじようしゆそのとんとん
元禄十一年領地減し今二万石播州赤穂之城主其曾孫なり

ほうみまう こんくいにんゆつがくしゆうえたいこじ しよねんふんじゆうきやうだひ
法名 護國院雄岳宗英大居士 生年四十九歳
いけだかつとせつろのつごてんこうつじよじよつち
池田勝三郎信輝入道勝入

ほうみまう けんこうえいせだげんじよつもん しよねんじよろくさいまたはじゆうななきい
(162) 法名 顕功永節大禪定門 生年廿六歳亦十七歳
いけだきいかみゆきすけ しよつろつ いう
池田紀伊守之助 勝九郎とも云

備前家の説には長臣下野將監と云人諫て(強く)引退しと云
 家説なれば信ずべし扱池田が方には秀吉公は主君にも非ず一旦の
 權威にて従ひしなれば父兄の戦死にて義理を立るは余り有父子
 兄弟皆死すべきにも阿らず小新(輝政初名※古新の誤り)存
 へ家を立て尤可也といふ小新(古新)後宰相に任ず男子三人有
 嫡子の利隆(163)と云中川清兵衛清秀力娘を娶りて出生し
 たり是池田の嫡流となりて今備前の国主三十二万石内蔵頭家
 是也、宰相輝政後に家康公の姫君を娶りて二男三男を出生
 す二男は早世す三男忠雄家康公之外孫なるを以て御養子となさる
 今因幡伯耆兩國の主也三十二万石相模守家是也

(164) 関白三好孫七郎秀次は秀吉公の甥なり秀吉公は尾州愛知郡
 中村の産にして其姉五(御)器所の民三好弥助に嫁して出生した

子なり十七才今度の大将となりて不覚の敗軍す秀吉公実子な
 きを以て秀次公を養子として関白職を譲り真関白秀次公と稱
 せられ夫より秀吉公を太閤と稱す秀吉公の実子秀頼出生の後
 秀次公太閤に対して謀反の間へ有ければ太閤いかりて高野山へ蟄居
 せしめ生害を乞須其妻子三十余人を死罪に行い同穴に埋め
 たり今京都三条小口之側に立つ畜生塚是也

堀久太郎秀政は五千余騎にて出たれば二拾万石内の領地にても
 阿られ武功智謀兼備名人久太郎と天下に沙汰有者也後に
 越後にて四十五万を秀吉公方賜る今式万石信州飯田之城主
 堀大和守家是也

秀吉惣軍十二萬五千余騎
 織田徳川兩家合四萬余騎

首塚

泥牛争角化城海

木馬飛光施火輪

試問蘭臺麟閣品

鬮眼上惹瞋孽

【訓読文】

泥牛 争角化二城海一
 木馬 飛光施二火輪一
 試 問二蘭臺麟閣品一
 鬮眼上 惹二瞋孽一

【読み下し文】

泥牛角を争ひ城は海と化す
 木馬は光を飛し光輪を施す
 試に蘭臺の麟閣の品を問へ
 ば鬮眼上し瞋孽に惹れる

【現代語訳】

諸將は泥にまみれて猶も覇を争い、迎り一面は血の海と化した。夜に
 なつても屍を積んだ荷車が続き、灯された松明の火が点々と闇夜に
 光の輪を浮かべている。居並ぶ諸將の屍に上下品階を聞くつとす
 ると目は虚空を仰ぎ顔は苦痛に歪んだ。

一、長瀬合戦之由来世に数多有といへども世上流布を書籍
 其実正からず何を見ても信用志がたし此書は丹羽家に伝る
 所の秘書にして世間に類ひなし故有て大椿山妙仙寺牧牛
 和尚の手より我家へ譲り請秘藏致入所なり来世(後世)に致る
 迄も替里なき実録なれば他家へ写譲は勿論禁也一見
 たりとも御貸し申候儀不相成旨約定の上写玉な
 れば代々其旨を相心得大切に所持いたし外へ見申候事
 不相成候間其旨写に變する、書記し禁玉也也

安政二年

巴卯六月

再写

長久手村

本主

小林定八 扣

(169) このしほはろうがいえてんらいひどう
此書者郎方家傳來秘蔵の正本 其筈

宝曆十一巳年

(170) 御公義御巡見の節郎が祖父弥兵衛・祐右衛門と伴に古戦場へ

案内 仕 軍物語 申上候

天明八年申年

殿様古戦場へ 御成の節祖父弥兵衛御案内 仕 軍物語

申上候

同年御巡見の節同断

天保九戌年

御公義御巡見の節郎(私)銀衛門と伴にご案内仕軍物語

申上候

故に元祖より代々の遺言を相守 他見を秘断の実録也

今般水野御陣屋御蔵書に 可相成旨被仰付候に 付奉
表老急の筆を以書に書写 仕 則奉 献上之候

恐惶謹言

(171) 慶應三年丁卯六月

長久手村 定八

平川善十郎 様

御陣屋

長久手市中央図書館



04766370

TRC23A030